

(表紙)

—郷土史編纂資料の第二輯として—

狩 太 カリフト夜話

{ アイヌ語「マッカリフト」山腹を廻る川の落口という義。尻別川に、真狩川、ルベシベ川の落合ひたるところよりこの名出でしものならん。この「マッカリフト」の「マツ」を省略せるものなりといえり。 }

狩太小学校社会科研究部

齋藤修二

目次

- はじめに
- 一、 有島武郎氏より木田金次郎氏への書簡。
 - 二、 山本愛子氏より木田金次郎氏へ
 - 三、 有島生馬氏より木田金次郎氏へのハガキ
 - 四、 高木志摩子氏より木田金次郎氏への書簡
 - 五、 山本愛子氏より木田金次郎氏への書簡
 - 六、 山本愛子氏の和歌四首
 - 七、 有島生馬氏より木田金次郎氏への書簡
 - 八、 有島幸子氏より木田金次郎氏への書簡
 - 九、 吉野作造博士より森本厚吉博士へ送られた有島武郎思ひ出の原稿
 - 一〇、 観光狩太小唄振付
 - 一一、 曾我農場開場二十年記念碑文
 - 一二、 曾我農場自作創設記念碑文
 - 一三、 開拓記念 苫米地金次郎翁碑文
- あとがき

デジタル化読み下し文作成グループによる註記

目次了

(註) デジタル化グループの責任で、原文の目次の最後にデジタル化グループの註記の行と下記の頁数を加えました。

17 16 16 14 13 13 10 9 9 7 6 5 5 4 3 2

はじめに

「果報は寝て待て」という言葉があります。別に私は寝て待っていたわけではありませんでしたが、こんなにも早く、ひよっこりと果報が来るとは、全く夢にも思っていなかったのです。第一輯のはじめの言葉の中に「第二輯は、木田金次郎さんをわずらわして、矢張り有島さんを主としたものになりたい」と書いておきましたのに、それが思いもかけず、今度の文化展に、果報がやってきたのですから、世の中の出来事というものは、考えようによっては変なものだなあ、と思ったりしたことでした。

狩太町総合文化展覧会は、町教委主催で狩太中学校を会場として、十一月六、七日と二日開催されたのですが、その中の郷土館へ、有島さん関係の資料あらば、出展してほしいと、私から木田さんへお願いをし、「岡村教育次長さんが出かけて行って借りてこられ、展示して下さったのでした。一覧するに、どれもこれもが貴重な文献ばかりであっただけに、何とかお借りして第二輯を作りたいという気持ちがある、これら資料は急いでお返しする、それも十日頃というのですから、

しかし、文化展がすみ次第、これら資料は急いでお返しする、それも十日頃というのですから、二日より早い。そこで、特急で一応書写をし、あとで原紙切りをすることとし、どうやら出来上がったのが、この第二輯だというわけです。従って、この第二輯は、木田金次郎さん岡村教育次長さん、それに、この輯の終り「に載せてある、」タイプで打った、二、三の資料を御恵与下さった岩間庄八さん、お三人の方の御好意によって出来上がったわけでありますので、皆さん方と共に、この際、深く感謝申し上げます。

尚、第三輯についてですが、今のところ日時は未定ですが、以前吉川銀之丞翁をお尋ねした例にならい、その中で、近藤校下の加藤岡平氏をお訪ねし、いろいろと伺った話を、又資料をもとにして、と考えておりますことを申し上げ、筆を擱くことにいたします。

昭和二十九年十一月十六日

齋藤修二

(表)

消印 岩内23.11.14 後3-6
虻田郡狩太村
狩太小学校
齋藤修二様

(裏)

文化賞受賞を喜んで下さってありがとうございます。大して功績もないので恐縮です。

お手紙の趣を拝承今少し家の工事で忙しいので、もっとおちつきましたら僕にできるだけのことをいたしましょう。

木田金次郎

十四日

一、有島武郎氏より木田金次郎氏への書簡

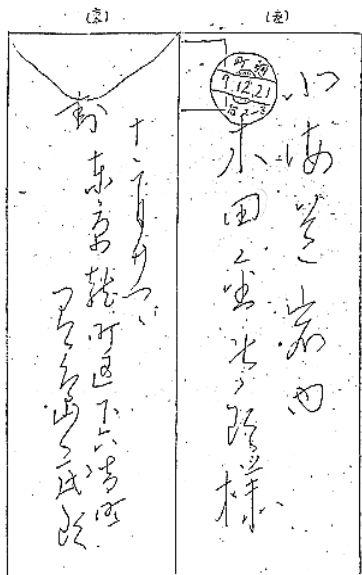
(表)

消印 麴町7.12.21 后23
北海道岩内
木田金次郎様

(裏)

十二月廿一日
東京麴町区下六番町
有島武郎

【デジタル化グループの註】左は「おわりに」に書かれてる、齋藤修二氏による有島武郎の筆跡を模して書いた封書の表書きと裏書きの一例です（最後に付けた註記参照）。



(註) 巻紙に毛筆にて書かれたるもの。消印から大正七年のものと思う

先達の御便りと今度のスケッチとをたしかに受取りました。兄の御進境には感心してしまいひいしました。然し私をして盲目な勝手をいはせて下さるなら兄の自然に対する態度には間然する所は更に(々)ないと思ひます。あれ位大事に自然を取あつかはふとした人を私は今の画家の中に見出し得ないやうな気がします。然し表現方法に行くとい兄にはまだまだ遠い道が残されてあるやうに思へます。例へば兄が近景を描き終つて遠景に移られる時画の上で其區別をなさる事を忘れは居られないか。兄が近景を見る時と同一の執着を以て遠景を見られるのは至当の事でありますが是れを画面に描き現はす段になると近景の物象を顧慮する事なしに遠景を描きこんでは画が自然よりも平板に単調になりはしないでしょうか。兄の畫は距離といふものは十分に現はされてゐるのに、何か遠さを思はせないのが、筆致の単調によるものではないでしょうか。もう一つは筆が少し自然に威圧され過ぎては居ないかといふことです。もつと自然を軽く見たらと云ふ意味ではありません。もつと兄が自然に合致したらと思ふまでです。是等は然し私の素人考へです。ご参考になるか如何か知りませむ

茲に一つご相談といふのは兄の畫を欲しいといふ人にあの畫の中數枚を分けて下さることが出来るでしやうか。それを許してお貰ひしたいのです。すぐ万望御返事を下さい。

十二月廿一日

有島 武郎

木田金次郎兄

後ろから二行目、万望とすれば、その意味がよくとれません。しかし一応万望としておきました。(齋藤記)

二. 山本愛子氏より木田金次郎氏へ

(註)○○に○○され、これを洋封筒に入れて発送したものとあり。
三〇〇印中〇〇〇〇〇局消印は「谷下 9・9・22 后0-4」とあり。

封筒表書き

消印 谷下9.9.22 后0-4
北海道岩内町
木田金次郎様 御直披
絵葉書在中

裏書

信州軽井沢三笠
直良内
山本愛子
九月廿一日午後

(その一)第二十一回二科美術展覧会(野方風景) 山本直武作のエハガキに。

北海道

木田金次郎様

山本愛子

直武に代り
お礼を申し上げます

御書面此地にて拝見いたしました。直武入選の事御悦び下され懇篤なる御言葉を頂き、有りがたう存じます。本年は随分一生懸命の勉強を致しました。入選ということよりも、私は其精進したといふのが嬉敷存じます。入選の晝は野方の庭で、自分としては一番特色のない、自信の無いもので閉口して居ります。絵はがきをお目にかけます。色彩は割によいと思ひますが、写生ではわかりません。

(その二) 全

相変わらず画を御研究の御様子、大成を祈って居ります。岩内のご友人も二科へ出品なされました由。御入選にならなかつたといふ事は誠に御気の毒、遠方の御方はことに失望なさる事と存ます。

(ある種の肖像画) 有島生馬氏のエハガキに

本年生馬の晝は苦心の力作の様に存ます。質の色といふ事に苦心と努力をした様です。夏中可なり勉強をいたしましたから、先頃から兩人を当別荘に招待いたし慰労かたがた、峠や方々見学に出かけました。幸、碓氷から見下ろした景が、朝霧の中から追々晴れて、山も川も大観先生の画を見る様でした。同じ人を三様に描きし図。

(その三) 第二十一回二科美術展覧会(扇) 東郷青児作のエハガキに。

今年は廿二日から廿四迄お休みがつづきますので、赤坂の人々高木の妹等が来られる筈で、私は夫迄待つて居ります。幸に当地に居りますと体の工合もよろしう御座います、○○〇稿を整理して居ります。

殊に特色のあるのは、やはり東郷さんなどだと思ひます。この外二点ほどありますが、皆夫々明快な色調です。私などには解しかねますが、若い方々は、大変に同氏の画を讚美して居られる様です。直武の研究所には大變力を入れて指導して居られるそうです。又、同所の展覧会の為直武は懸命です。

(その四) 第二十一回二科美術展覧会(チンドン屋三人組) 藤田嗣治作のエハガキに。

○○○氏の二番目の令息の御
○○○って居りました。御覧
になる事が出来ないので残念
です。
お礼かたがた絵葉書を御覧に
入れます。

本年は藤田氏の入会で大変賑やかでした。
色々面白い晝が、沢山一室を飾って居りました。○○○
日に帰京して生馬夫婦と三回ほどみて歩きました。
若い方々も、良い素質の方が沢山ある様に思ひました。
安井先生のもものは、いつもながら評判がよろしう御座い
ます。此晝は随分大きなものでした。

三. 有島生馬氏より木田金次郎氏へのハガキ

(表)

消印 鎌倉29.1.22 後6-12
北海道岩内町
木田金次郎様
かまくら
生馬生
一月二十一日

(裏)

御手紙により東京での個展の件も好都合に運ばれたる由、御喜び申し上げます。今日は高
木喜寛の一周忌で一寸訪ねて来ました。此方一同無異。明日一寸入信します。

(註) 入信とは信州入りをするという意味か。

四. 高木志摩子氏より木田金次郎氏への書簡

(表)

消印 田園調布 29.1.8 前0-6
北海道岩内町
木田金次郎様
○○

(裏)

封 東京都大田区田園調布三十四四
高木し満子
一月七〇出

(註) 雲仙国立公園記念切手十円のもの貼付の日本封筒二重のものを用いられ、切手消印
は昭和二九年、一、八とあり。便箋は二枚で、いずれも左上隅と右下隅とに謡曲文句らし
きものの一部分が印刷され模様もあり。
本文中の「他のおふたりさん、あの時のおふたりさん」とはだれを指すものか不明。

おはがき有りがたう存しました。過日は久しぶりにお目にかかれ、本当に、是れでよかったですと嬉しい御座いました。私のわがままが通つたわけです。あなたの様な忙しい方を能く寄つて頂いたりして。でも昔と少しもかわらず、それ以上に面白いお話を伺つたり、申上げたりしました。おしやべり過ぎた様でした。あなたにはいいけれど、他のお二人さんに一寸済まない様な気がして後悔しました。秀寛もあの時、他に行くはずでしたが、餘り愉快になつて、すっかり落付いてしまわれました。兎に角、良い時を過ぎて頂きまして有がとう御座いました。

あの時のおふたりさんも本当に良い方ばかりで写真の私は一寸おかしうございますが、同封致します。御恵存下さい。

あなたの画の東京に参る日をたのしみにして居ります。

今は雪の中にお暮らしてせう。どうぞ御自愛願上ます。

まだお目にかからぬ奥様やお子様方にもよろしく願います。

一月七日

志満子

木田金次郎様

五 山本愛子氏より木田金次郎氏への書簡

(註)右書簡は封筒なく、便箋四枚にかけられたるもの。便箋は上等の生羊紙で半頁に八行書くによく、縦線と枠とは赤色印刷で二ツ折できるようになってゐる。最後の欄外余白に「丸ビル和風堂製」とあり。

本文中、架作とあるは傑作の誤りではなからうか。又、チルダ嬢とは、愛子氏の岩内訪問年月日は、共に不明、後日木田氏に照会することにした。松氏、呉氏についても同様。

七月二十五日朝

愛子

木田金次郎様

御心にかけれられ、御手紙頂き、只今拝見致しました。私よりも御無沙汰申上げて居り、過日来、家の内整理をしておりました所、昨年チルダ嬢来軽の折撮影の写真が出て参りました。軽井沢から御送り申上た様に思つて居りましたのに、忘れたものと見えます。

それで御無沙汰御詫び少々御便りを申上げんと思ふ○○御音信を頂き、何か異(ママ)心傳心とでも申します様な気がして、御地滞在中御親切に御世話被下ました事ども思ひ出されながら拝読いたしましたわけです。

御尊父様が御大患にて御心配なされ、御看護をつづけられた結果御恢復の由、お悦び申上ます。そのためお畫の方はあまり御畫きにならなかつたとの事、色々書物を読破された事と存じます。いつも御頑健なる御様子を深く御喜び申上げます。

(以上便箋一枚目が終わって、欄外に 夕立から何か涼しくなりましたが、過日は九十度以上でした とあり)

御心配頂きました私の体も、昨年お送り下されましたコア罐詰及果実等頂きました為か、何の為か、春以来忘れた様に快方になり、大に活躍しました。直光の戦地の事も御心に懸け下され

難有、昨年は只くよくよと心配ばかりいたしました。が、弐月に一度戦友の遺骨を持ち帰り一週間滞在面会非常に元気で一度も病気をしたこともなく、工兵故前進をつづけ橋の修繕、鐵路工事、バラック建等、夫は夫は忙しく、手紙を認める間もなく、或時はアンペラの上に寝たり、食物も届かぬ事等ある由ながら、無事に勤務して居るから安心して呉れと話を聞き、我子ながら日々の辛苦、御国に捧ぐる努力を感謝致し、銃後の者が、体など弱くしては誠に相すまぬと心を強くして、働かせて頂いて居ります。四月には除隊の噂もありましたが、何事もなく、長期戦といふ事故、いつ御歸還致すことか、皆無解りません。暑中は随分つらい事と存じます。幸い体だけはつく様です。

(以上で二枚目終わり)

生馬も旅から帰朝又、ハワイへ、暁子が妊娠の為参り、あちらで流産、気の毒でしたが、晝もだいぶかけて帰りました。芸術家に戦争は禁物、大家連も晝は売れず、何の張合もないとこぼして居らるる由。生馬も日本はいやだと申して居ります。生馬は相変わらずで、体は丈夫、里見は子供が五人、だんく大学や女学校卒業等で中々骨が折れる様ですが、相変わらず書いて居ます。元の様に居催促程の景気は無い様です。行郎はライジングサンを切上げ、日産の方に這入り、過日社用で御地室蘭方面までも参りました由、元気で働いて居ります。松氏には久敷御目に懸りません。呉氏には時々番町でも御目にかかりますが、緩々御話もいたす暇なく御別れして終ひます、直武もあまり傑作もできず困りますが、熱海に参り少し晝が出来、十五六枚程〇〇〇、友達と展覧会を初める前日からあの大雨にて大騒ぎ、それでも展覧会は致し、罹災民に幾分

(以上三枚目は終わり)

寄附して皆持ち出しで、帰ったわけでした。どうもデレンマにかかり、面白からぬ様子、何とか救ってやり度思つて居ります。秋頃には結婚もさせ度と願つて居ります。二十三日に主人七瀬直久は軽井沢へ参りましたが、私は留守居の都合で、二十八日頃から参る筈。女は女らしく色々とう事のあるもの、毎日懸命に片付ものや雨後のかびと戦つて掃除などして居ります。池は溢れ、一時は電車も不通になりました。押入など汚しくシケて居り困つて居りますが、幸に体は大した障りなく暑さと戦ひ用事と戦ひつづけて居りますから御安心願います。早く戦争も片がつくとよいのですが、何もかも高價になり、品が粗末になり、人心も味気なく思はれます。幸に一家中は、是と申障りなく、御安心願度、敏行は卒業後外務省の見習の様な事をして居り、行三は現役にて入隊、出征する様な事は無い様です。行光は幸ひ元氣になり、劇に精進して居ります。

欄外に「段々乱筆になりますから、是で失礼、亦軽井沢から申上ます」とあり。

六 山本愛子氏の和歌四首。

(註) 丈夫な薄青色日本紙、一尺二寸五分に一尺七寸五分のもの。二つ折りとして横に細長くして、折目を下にして上を開くによくして、和歌四首を表に二首、裏の方に二首かかれています。紙には何か物を包装したような跡が明瞭についている。しかし、包装紙としては勿体ないものようである。尚用紙には別に横線はないが一寸おきに縦線の透しがある。

天地を

きよめて

この日

ふる雪は

生れ

ますべき

浄土にや

似ん

いとけなき

孫も

なみだ

に

泣きぬれて

はての

御事

見送りて

あり

悲しまじ

けふよう

後もみここ

ろは

われ等に

添ひて

常に

いまさむ

別るれば

この春さびし

とこしに

ふたりの

母は

胸に

いませと

(註) 右の歌は、いつどんな時に詠まれたものか不明なるも、生家有島の母か婚嫁先の山
本家の母かの死去にあたって詠まれたものであるうか。ふたりの母の文字から見ればどう
もそのようにも思われる。

七 有島生馬氏等より木田金次郎氏への書簡

(註)毛筆による墨書のもの印刷に附したるもの。奉書巻紙を用い、封筒は白の一重のもの。表書きは北海道岩内木田金次郎様、裏面は活字印刷で東京市麴町区下六番丁十番地有島生馬電話九段二六二番とある。

去月三日母幸子浄月院死去の折は御懇篤なる御弔問並に霊前へ御鄭重なる御供物を辱ふし御厚情の程度深謝候。本日七七日忌明に当り聊か追善のため粗品差上仕候間何卒御受納被下度、右は右御札迄如所御座候 拜具

昭和九年三月廿三日

有島行郎
有島生

木田金次郎様

(註) 木田金次郎様は毛筆で個人別に書かれたものであろうと墨色から判別せられる。尚昭和の和は味と書かれている。

八 有島幸子氏より木田金次郎氏への書簡

(表)

消印 赤坂3.7.24 前89
北海道岩内町
木田金次郎殿
○○

(裏)

封 東京市赤阪松町六
有島幸子
七月二三夕

(註)巻紙に毛筆にて達筆にかかれたもので、解説にはかなりの骨折りであった。一輯にあるものは遂に不詳一ヶ所をそのままにして、空欄としておいたが、これは吉川翁の協力を得て全部判明出来たのは嬉しいことであった。冒頭の林雨は霖雨と解した。

林雨の加りし梅雨期も尚去りやらず、曇天又小雨降くらし、此頃の涼しさは御話にもなりません。御地は一人の事ならん、余りに心地あしく被存候。

過日は御多忙の所 御立寄被下候にもかゝかわらず、例の通り何のおかまひも出来不申、誠に勝手に外出等致し、後にて考居候。実は其夜御出立、御誘いも不致候処サワなくして、あけの日の夜御立の由、政より承り誠に残念致申候。せめて文楽にても御同行可致かりしをなど考申候。御無事に御帰道の由、いろいろ御申越被下候段御礼申上候。青山へもお出被越候との事、定めし地下にて悦候事と存申候。

御覽の通り、前にかわる日送りとして、心に任せかね候事ばかり御ゆるし被下度、御察の通り心身共に苦をはなれて世渡り致し、孫等が成人、一家を立てる時を楽しみ、自身は老込み候身故、何も別段の事も届不申候間、彼等の為に十分注意致候て、我家を少なるとも建て、祖父の面目を取代し候得ば、いささかにても、私の志、相立候半とのみ考え、昔片気には候へども、嫁し参り

候家故、何とか故人に代り、孫等三人の独立を以て私の罪を謝度考居候。折角乍不及、苦心の結果果豊かとは不参候へども、七児の為、又孫等の為、たくわへ候も、一人の為に今日の有様に立至候は全く私の不行届よりと存候間、悔ても帰らぬくりことに御座候。

老命に至り、何一つとして自身の働きも出来不申、只々身をつめ、子等孫等にめいわくかけぬまでと心掛け居候。明日頃より嫁等孫をつれ、政も同行、蛭ヶ谷へ転地○致候事に相成、私は勝手ながら留守居役承り可申。

折節は又出かけ可申、御安意被下度、番町も皆々出かけ軽井沢はずし過ぎ候様子、都も是よりは涼しく相成可申候。くれぐれも大切に御過し被下。

生馬等帰朝の際は又々御上京待上候。御礼迄、早々かしこ。

二十三日夕

雪香女

木田金次郎殿

(註) 政とは女中の名前だろうか。

雪香女はゆき子、幸子に通ずるから用いたものだろうか。

九、吉野作造氏より森本厚吉氏へ送りたる有島武郎思い出の記原稿。

(註) これは吉野作造博士が外遊の途次上海の宿舎で書かれ、森本博士へ送られた有島武郎思い出の記の原稿そのものである。

末尾に八・一とあるが武郎死去の年、即ち大正十二年のことと思われる。(武郎の死去は大正十二年六月九日である。)

用紙は上質の洋紙で、原稿用紙か便箋かと思われる。No文字は横書きになっているし、一一一行の罫があるが、たぶん横文字用のものだろう。六枚にわたって青インクで書かれているが、後で森本博士が新聞か雑誌かに載せるために書かれたものと思われるヶ所が景色のちがいがから判断される。

1. 玲瓏玉〔ママ〕の如き人格者 吉野作造
2. 段落の「の印」(一)(二)(三)(四)句読点も。
3. 使用活字指定したらしい 二号 三号 或は6〔ママ〕号
4. 最後の一行 いのだから之で御免を蒙ることにしよう(上海にて八一)等々によつて。

二号

赤インキで

三号

玲瓏珠の如き人格者

吉野作造

題名の文字と共に

黒インキで。

(以下同じ)

森本兄足下

(一)

赤エンピツで。

有島兄の死は最も親しかった兄に取って非常な非痛事であったと考える。彼の死は彼の一家に

取つての大損害であつたのみならず、兄にとつても亦復へし難き痛みでなければならぬ。兄に向つて御悩みを述べるのも変なものだが、兄に於いては敢て当らずとも思はれまい。」

九月号の文化生活に有島君の印象を書き送るといふ約束は不幸にして数日遅れた。船の都合で出帆が三日延び、船の中は割合に穩であつたに拘らず海に弱い僕には筆取る丈の元気が出なかつた。斬「ママ」くして今上海に来て些かの餘暇を見て机に向かつたが、うまく貴方の間に合へばいいかと念じて居る。」

しかも實はあらためてさう書くこともないのだ。いろいろの雑誌からせめられて、書くだけの事は既に八月号のに書いて仕舞つた。今書けば矢張りまた同じ事を繰り返すに過ぎぬ。強いて変わったことを書くとすれば碌なもの出来ぬということになる。此点は豫め諒として貰ひたい」
今から回想すると、僕が始めて有島君と相見えたのは、大正八年頃と思ふ。春か秋かしか覚えて居ないが、兎に角、袴を着てゐる頃であつた。餘り衣物のことに無頓着な僕も、君が馬鹿に渋い上品な好みの立派な装えをしてゐたのに気がついた、書類入れ、万年筆入れ等持物に一として粗末なものはない。矢張り金持ちだなどは僕の第一印象であつた。といつて僕は君の金持ちということに微妙だも不快な感を有つたのではない。寧ろその渋い上品な趣好に一種の快味をさへ覺へたのであつた。」

(二)

場所は東京帝大の汚い第二学生扣所の一室であつたと思ふ。新人会といふ一団体の招きに応じ懇談的に文芸上の意見を述べるといふ会であつたことは今にははっきりと記憶してゐる。新人会に別に招かれたのでもないのです、どうしやうかと餘程躊躇した後、有島といふ人に一度遇ひたいと云ふ欲望に惹かれて、遅ればせに往つたのであつた。

僕の往つた時は、丁度一ト通りの演述は済んで、誰か一学生の質問に対へると紙の上に万年筆で円や三角様のものを書きながら例の子バ子バした甘つたるい句調でポツリポツリ説明して居る所であつた。あの子バリ附くやうな物の言い振りが如何にも聴者をして同君を懐しく思はしむるもので、迂つかりすると此方も一つ向ふに甘へて見たくなる事すらある。僕はこの初対面で挨拶もそこそこにして馬鹿に同君を恭はしく思ふ様になつたのであつた。」

其の後度々遇つたので一々は記憶して居ないが、一段と親しみを加へる様になつたのは、言ふまでもなく兄の文化生活の事業に相提携して一臂の力を捧ぐる様になつてからの事だ。三年前の日比谷陶々亭に於ける半日の会合の如き今に忘れ得ぬ楽しき思ひ出の一つである。」

有島君の思想に就ては餘り能く知らぬ。著書は読んだが、専門も違うので詳細に記憶に留めてない。文化生活研究会の大坂方面講演の帰り特急列車内に於ける我々三人の一日の饒舌は可なりお互いの願いの傾きなり気持ちなりを夫れとなく鮮明にしたものと思ふ。あの時得た僕の印象を今辿つて見ると、僕は有島君を苦勞性な人だと観た。余計な事に心配する人だなど観た。夫れ丈初生な真つ正直な○な○純な人だと考へた。僕などとは慥に別の世界に居る人だなど観たのだが、気持ちの純な所がハッキリ分かつたので、附き合つて行くに何の障害もなく、否附き合つて大に訓へらるる所あるを感じた。殊に其の玲瓏珠の如き人格には全く惚れ込んで仕舞つたのであつた。」

(三)

僕は有島君と住んでゐる世界を異にして居ると感じたのは、有島君が金持ちだと云う豫断に基くことが多い様にも思ふ。僕自身は元来さう貧乏人でもない積りだし、又苦學した経験などもないのだが、さりとて少しでも金に餘裕のある生活をしたこともない。寧ろ絶へずも少し金に餘裕があつたらばなアと不本意ながら財の神に憧憬して来たのであつた。だから有島君の様に、金がある否ありあまつてと云ふことを堪へがたき苦痛とする気持ちが分らない。理屈では分ると云ひ

たいが、僕の胸に成程なアとピンと来ないのである。┌

併し執れにしても、有島君は親譲りの財産をあつて居たので、そこで財産をみな投げ出すと決心されたが、そこが金持ちの若様だけに本当の貧乏人になり切れない所がある。彼自身意識して居たか、どうか知らぬが、彼が赤裸々の貧乏人になって仕舞ふことは彼の生い立ち、かれの教養並びに之等の基く彼の趣向などが許さなかつたものらしい。そこに彼の内心の悩みがあつたのだ。

譬へて云ふなら夏の夕方一風呂浴びて汗を流さうと云ふとき、彼はすぐ○を考へる。天下には幾万の風呂に入れぬ貧乏人がある、自分だけいい気になつて汗を洗ひ流し落としては済まぬのではないかと。斯くて自分の置かれる結構な境遇が苦悩の種となるのである。そんなら貧乏人と同じ様に風呂に這入らず居れるかと云ふに、それは無論出来ぬ。からだは綺麗にしておきたい。汗みどろの俣では居り切れぬ。そこで遂うかうかと風呂に入る。入つて了ふ。出てから大変な罪惡を犯したやうに今度は真剣になやむと云つた様な所が彼の生活になつたらうか。┌

四

彼の生活の表面だけを見ても身の廻り一切相當な金を掛けて居た。自分でも働いたであらう。併し親譲りの財産を全く棄てて顧みなかつたとは云へない。真面目な人だけに夫れを非常に苦しめた。そこを脱却せんとしてプロレタリアの友になつて見やうとも志した。否思想の上では慥に所謂プロレタリアートの味方にならうと覺悟をきめたい。只彼の教養や彼の趣向が右の覺悟をよしとし、彼を名実共に立派なプロレタリアに爲し了するにはまだまだ永い苦闘の年月を要するのであつた。┌

思想に於て新しく行藏に於て古いと云ふ所に彼の悩みがある。之を真剣に苦痛とした所に彼の人格の至誠が光つては居る。併し斯うした人は彼と同じ様な境遇に居る人に必ずしも尠くはないと思ふ。戀愛問題に就ても彼の行き方には格別の親しみなく、之に對する思想は全然旧套から脱している。而して此間の矛盾を彼の死は決して解決したものでないことは云ふまでもない。斯う考へると彼の死の意味も幾分僕には分る様に思ふ。┌

彼の死には僕は徹頭徹尾服さない。頗る遺憾なことに彼の爲にも惜む。彼に於て責むべきは彼の死にあらずして、彼の眞と誠で一貫した四十六年の生涯である。彼は死に失敗したが、生に成功した人だと謂つていい。生に成功したが故に、世人は○つて彼の死にも亦貴い何物かがあるらしく迷ふ。それだけ彼の生涯は立派なものであつた。之等のことは僕既に八月号の二、三の雑誌に述べたから、今は略する。┌

今、上海は暑い。兄の曾遊の地だけに筆を取つて机に向へば頭がガンガンする位はお察しのことと思ふ。と云つては兄に済んでも有島君と読者に済まない訳だが、實際暑くて堪らないのだから、之で御免を蒙ることにしやう。

(上海にて 八・一)

振付



一つの



二つの



三つの四つの



五つの



六つ
七つ
八つ
九つ十の



十一
十二
十三
十四
十五
十六

以上の動作をチヨチヨンがチヨンより繰り返す。

一列円陣を作り円心向いて立ちます。曲のどこからでも踊り始められますが、八〇〇（八〇〇）聞いてから踊り始めましょう。チヨチヨンと拍手をして右を向きチヨンと一つ拍手をする。右足を出し第一図の如く右手を体前に伸ばし左手を掌内向きにして左頬の横に立てる

左足を出し、第二図の如く左手を体前に伸ばし右手を掌内向きにして右頬の横に立てる

“一つ二つの”動作を繰り返す

右足をフワツと前に出して両手を手前から掌をかえして第三図の如く掌を上向きに出す

掌を下向きにして両手を左右に開き乍ら第四図の如く右足を元に揃える。

左足をフワツと前に出して第三図と同じ動作をする

左足を元に戻して両手を横に開く

右足より軽く〇〇〇右回りし乍ら両手は横から頭上円にして（掌向き）円心に向く（第五図）

右足前に出し、重心をから左足を一寸伏せ、第六図の如く両手を共に左右に開く

右足を左足に揃えて拍手を一つする。

再び右足を円心に出して第七図の如く両手頭上にやまを作る

左足を出して第八図の如く両手は斜下方に伸ばす

左足を引き第九図の如く右手を上方にかざし、左手を左斜後方に流す

右足を引き第十図の如く左手を頭上にかざし、右手を右斜後方に流す

一一、曾我農場開場二十年記念碑文

（表面）

開場二十年記念碑

南条文雄書

(裏面)

拓土地勸稼穡所以阜国本厚民生也明治三十三年五月三十一日子爵曾我佑準閣下得国有未開地于此土經營農場而因拓殖矣當時深林弥望望奔斤未曾入老樹交柯榛○密茂猛獸宅焉毒蛇蟠焉乃伐樹度蒼火之理之墾耕就緒而茫茫荒野交通無便纒依独木舟与馬背耳而米塩鋤犁皆不可遠不需之於岩内三十七年函樽鐵道開通也始得利便宿艱際除去移住者年多開墾之業頓進社寺学校百般設備漸成面目為一新水早豊凶動不免困憊而閣下保護愛偽無不至時給食糧金品又設奨励賑恤之以勗成業奚得不感激奮勵協力乎今也。

耕地達老千四拾餘町所在唯有風致林一部耳此間故秀雄氏繼戸田忠次荒浪淺平二氏有管理任銳意指導至見今日成果於戲罷熊遠跡蚊龍遁藏沃野穰穰百余佃戸安堵樂生可謂閣下之賜也本年方挙開場二十年紀念式我等浴閣下之恩沢喜会於此盛儀刻之於真珉併證子弟後昆
大正十年七月三十日

代曾我農場小作人一同

浅間孝夫撰文石川梧堂書之

(曾我東啓園所在)

一二、曾我農場自作創設記念碑文

(表面)

自作創設記念

子爵曾我佑邦書

本農場ハ明治三十三年先代子爵曾我祐準閣下開墾ニ着手セラレ明治四十二年四月付与ヲ受ケ温情以テ経営ニ当ラレ二代現場主祐邦閣下亦先代ノ遺志ヲ繼承農業ニ深キ理解ヲ垂レ小作者一同慈父ト慕ヒ今日ニ至リテ場主ハ夙ニ自作農タラシメントスル意図ヲ有セラレ小作者三十有余年孜々トシテ農業ニ従而シテ農ハ日本の〔ママ〕精神ヨリ自作農ヲ懇願スルニ至レリ
村長中村洋氏小作代表高瀬金次郎氏高橋静氏場主閣下ニ歎願ノ処自作農トシテ開放ノ御快諾ヲ賜リ農場管理人高橋重平氏能ク連絡ニ当リ茲ニ創設完成ヲ告クルニ至レリ
二代相嗣ク温情ニ感激一同和衷協力自作農トシテ大成ヲ期シ厚恩ヲ永ク子孫ニ伝フル為以テ碑ト為ス

昭和十三年七月吉日

(裏面)

自作創設委員

高瀬	金次郎	米田	貞五郎	阿部	友一
高橋	静	高瀬	与次郎	佐藤	俊一
千葉	六三郎	高橋	由治郎	佐藤	幸国
和佐田	乙吉	曾我部	麻市	佐竹	作造
栗原	千代治	中条	与四郎	木村	浅吉
倉地	規逸	奥村	喜重	鈴木	藤十
梶田	寅司	増原	宇平太	菅原	精吉

自作者氏名

高橋重平	中村洋	顧問 松原宇平	住友六三郎	高瀬金次郎	建設委員 松田石沙	八卷吉見	栗原イソ	熊谷寅雄	栗原清四郎	栗原与一	倉地規逸	久保久代治	熊谷千三郎	岡崎徳三郎	奥村儀三郎	奥村喜重	和佐田正徳	和佐田三郎	千葉六三郎	保浦武夫	穂山与十郎	林繁一	林政吉	芳賀年一	芳賀幾之助
		阿部友一	高橋由次郎	鈴木清生	佐藤○辰五郎	佐藤芳蔵	佐藤貞治	佐藤辰次郎	青山重雄	青山進一	阿部友一	阿部常吉	青山春雄	小泉庄三郎	小島次男	増原清生	高田謙太郎	高田金次郎	高橋浅吉	興坂与吉	米田貞五郎	吉村辰次郎	梶寅司	和佐田卜松	和佐田梅松
		本間奥松	奥村喜重	佐藤俊一	菅原民雄	菅原精吉	住友与一	鈴木藤十	三田実意	切村松雄	木村浅吉	佐竹留造	佐竹作敏	佐藤新蔵	佐々木幸国	佐藤幸一	永田銀志	中条清四郎	中条与四郎	長谷地松次郎	曾我部麻一	高橋清一	竹内治作	高瀬栄次郎	高橋兵衛

狩太尋常高等小学校校長
 石請負人 從七位 町田勇書
 森梶藤 熊四郎

一三、開拓記念 苦米地金次郎翁碑文

(蘭越大谷地所在)

(表面)

開拓
記念 苦米地金次郎翁碑
子爵渋沢栄一書

(裏面)

金次郎翁ハ旧盛岡藩士ニシテ世々奥州北郡相坂村ニ住ス幼ニシテ父ヲ失ヒ年少家政ヲ整理シ又
村政ニ携ハル壯年ニ及ヒ夙ニ宇内ノ大勢ヲ察シテ南米殖民ノ大志アリ明治二十年自ラ北海道未
開ノ地ヲ踏査シ遂ニ開墾ノ意ヲ決シテ地ヲ尻別川沿岸大谷地蘭越ニ相シ同二十三年○者全家ヲ
挙テ同志ヲ率ヒテ移住シ寒威瘴癘ト戦ヒ荆棘ヲ拓キ悪獸ヲ○ケ具サニ衆ト共ニ慘憺タル辛苦ヲ
嘗ムルコト拾余年遂ニ開拓ノ目的ヲ達成シタリ
誠ニ我力郷土創生ノ恩人ナリ翁ハ人格識見高邁ナルニ加ヘ徳操仁慈人ニ優レ実践躬行以テ範ヲ
衆ニ垂レ其学徳偉績ハ正ニ此地ト悠久タルヘシ茲ニ碑ヲ建テ記念ス

昭和○年八月 岡 ○謹書

開拓○○○○者氏名

苦米地	金次郎	小	稻	栄	助
○山	源助	三	畑	○	太郎
沢口	仁太郎	小	山	寿	太
田畑	右間	佐	々	木	丑
佐々木	栄助	吉	田	栄	吉
川原	田鉄	佐	々	木	嘉
永川	長之助	栗	山	○	蔵
岩上	判七	佐	々	木	徳
					助

あとがき

この第二輯では、目次のところで、第一輯とは何か違った趣向をとつとめたつもりでしたが、さ
て出来上がって見ますと、或る一部分だけでも出来るだけ肉筆に近いものにしたという最初の
考えにくらべて程遠いものになってしまいました。それに矢張り文字の拙劣さですが、「手なら
ひをものうきことと思ひつる おさな心を今くゆるかな」の通り後悔しています。第三輯では何
とかしたいものだ」と淡い希望をもってはおますが……。

昭和二十九年十一月八、九、十日 資料浄写
昭和二十九年十一月十一日 印刷着手
昭和二十九年十一月十七日 印刷完了
昭和二十九年十一月二十日 発行

編集印刷 狩太小学校 齋藤修一
製本 狩太町 稲林印刷所
発行 狩太町立狩太小学校

デジタル化読み下し文作成グループによる註記

読み下しの基本方針

- ① 齋藤修二氏の原文の体裁などではできるだけ尊重し維持する。ただし目次の構造については変更する（以下に理由説明あり）。
- ② どうしても読めない部分は○で示す。
- ③ 繰り返し記号（長い「く」など）は（「長い長い」など）同じ語句を繰り返す方法で記述する。

読み下しグループの註記

今回、デジタル化読み下しグループによる註記は、テキスト中の関連した箇所に近い位置に挿入するのが読者に親切かもしれませんが、作者の齋藤修二氏の註記との混乱を避けるため、また第二輯全体にかかわる内容も含むため、全テキストの最後に、一括して掲載しました。

原本の目次について

原本に載っている目次の表記方法は、一般に各章の題目の列挙となっておりますが、この第二輯の目次はそれと異なり、特殊な形をしています。一、から五、までと八、は章の題目の後ろに、書簡の場合は封筒の表面と裏面、はがきの場合は表と裏のコピーまで載せています。九、では章の題目に加え、本文の最初の部分が含まれています。

このような構造になっていることについて「あとがき」では「趣向」として目次の体裁を工夫したことが書かれています。齋藤修二氏は有島武郎・生馬・愛子・幸子などそれぞれの人物の筆跡を真似て書くことだったと見られます。しかし「肉筆に近いもの」を目指したが「文字の拙劣さ」のため満足のいくものにできなかったことを「後悔」しています。このことを踏まえ、読み下し文作成グループとしては目次が紛らわしくなっていることを考慮して「普通」の形に単純化しました。しかし、「原文通り復元する原則」には反するので、どのような趣向だったかの一例を示すため、一章の有島から金次郎宛の手紙の初めにそのコピーを掲載しました。また第二章から第八章の五人については割愛しました。

書簡を公開する問題について

第二輯の中心内容は書簡の公開です。発行の昭和二十九年当時個人情報保護にあまりナーバスではありませんでしたが、現在「夜話」で書簡の復刻公開に際して、読み下し文作成グループ内で、個人情報の公開という視点から検討しました。

一般に、私信の公開については差出人本人の許諾が必要です。しかし、有島武郎とその親族も木田金次郎氏も亡くなっています。齋藤修二氏も鬼籍に居られます。2023年の現在から許諾を得る方法はありません。「はじめに」で書かれている狩太町総合文化展覧会で有島たちの書簡を公開するにあたって、木田氏が有島たちから許諾を得ていたとしたら、「カリフト夜話」も私たちの「再版」も許諾問題をクリアーできていると言えそうですが、現実に行われたことを裏付けるものはありません。

ご都合主義なのですが、こう考えました。「夜話」が発行された際に私信公開という観点で問題視されて揉めたという記録が管見の限りではないこと。実際に現代人の感覚で読んで見て、他人に知られたくない内容が書かれていて公開されたらまず間違いなく非難される内容のものは

ないこと。たとえば第八章で母幸子が家族の消息を木田に伝えるに際して、彼女の中で伝えても問題はない事柄だという自己承認が存在していたと思われれます。そこで、発刊から半世紀以上という「時間の経過」も許諾を与えていると解釈してよいのではないかと考えました。というわけで「カリフト夜話」のままの形で行くこととしました。

「開基二十年記念碑」書き下し文

(開基二十年記念碑の本文が漢文であることから、読み下し文作成グループの責任で、日本語として読むための書き下し文を以下に用意しました。)

土地ヲ拓キ稼穡ヲ勸ムルハ国本ヲ阜ニシ民生ヲ厚クスル所以ナリ。明治三十三年五月三十一日、子爵曾我祐準閣下有未開地ヲ此ノ地ニ得、農場ヲ経営シテ拓殖ヲ図ル。

当時、深林弥ク望望トシテ斧斤未ダ曾ツテ老樹ニ入り柯榛ヲ交ヘズ○密茂シテ猛獸宅ミ毒蛇蟠ル。乃チ樹ヲ伐リ蒼ヲ度ベ之ヲ火シ之ヲ理ヘテ墾耕緒ニ就ク。而シテ茫茫タル荒野交通ニ便無ク纜ニ独ダ木舟ト馬ノ背ニ依ルノミニシテ米塩鋤犁ハ皆之ヲ遠ク岩内ニ需メザルベカラズ。三十七年函樽鉄道開通スルヤ始メテ利便ヲ得、宿艱除去ニ際ル。移住者年ニ多ク開墾ノ業頓ニ進ミ、社寺学校百般ノ設備漸ク成リ面目一新ヲ為ス。水旱豊凶スレバ困憊ヲ免レズ、而シテ閣下保護愛撫シテ至ラザル無ク時ニ食糧金品ヲ給ヒ又奨励賑恤ヲ設ケ之ヲ以テ成業ニ勗ム。奚ゾ感激奨励協力セザルヲ得ンヤ今ナリ。耕地ハ壺千四拾餘町、存スル所唯ダ風致林一部有ルノミ。此ノ間故吉田秀雄氏繼イデ戸田忠次荒浪浅平ニ氏管理ノ任に有リテ銳意指導シ今日ノ成果ヲ見ルニ至ル。於戲、熊ヲ罷ラスコト跡ヲ遠クス、蛟龍ハ適レ蔵レ沃野ハ穰々タリ。百余ノ佃戸堵ヲ安ンジ生ヲ楽シムハ閣下ノ賜ト謂フベシ。本年方ニ開場二十年記念式ヲ挙グ。我等閣下ノ恩沢ニ浴シ、喜ビテ此ノ盛儀ニ会ス。之ヲ真珉ニ刻ミ併セテ子弟後昆ニ證ス。

語註 この場合の読み方と意味は下記の通り。

【稼穡】 かしよく 種まきと取り入れ。

【阜】 ゆたか 盛ん、大きい

【弥】 あまねク 広く、一般に

【望望】 ぼうぼう 広々としてはるかなさま。望望の原義は「恥かしく思うさま」だが、ここでは茫々の意味で用いている。

【斧斤】 ふきん 斧も斤も「おの〓鉞」のこと

【柯榛】 かしん 榛の木で作った斧の柄

【宅】 すむ 住む

【蟠】 わだかまる とぐるを巻く

【蒼】 そう 手書きで判読し難いので、文の流れを汲んでこの字を当てた。

【纜】 わずか 僅か

【鋤犁】 じより からすき。農具

【宿艱】 しゆくかん 長い間の苦しみ

【際】 いたる 至る

【水旱】 すいかん 水害と干害。「水旱」は間違い。

【困憊】 こんばい 困って疲れ果てること。「困憊」は間違い。

【賑恤】 しんじゆつ 貧者や被災者などに援助するため金品を与えること。

【勗】 つとむ 務める。努力する。

【於戯】 ああ 感嘆の語。

【罷】 まかる 貴人のもとから退去する。

【蛟龍】 こうりゆう みずち(水の霊)。想像上の動物。水中に棲み毒気をはいて人を害するという。

【穰々】 じょうじょう 穀物が豊かに実る

【佃戸】 でんこ 小作人

【堵】 ど 住まい

【珉】 みる 玉のように美しい石

【昆】 こん 子孫

書き下しに当たって配慮した事柄

一、原文に「水早豊凶動不免困憊」及び「度蒼」とあるところ

「夜話」の中では上のようになっていますが、「早」「困」は誤りで、正しくは「早」「困」です。読み下し文では正しい方を採用しました。刻まれた石の上の文字そのものが誤っていたとは思えません。開拓の苦勞を「水害や早魃、豊作も凶作もあり、どうかすると困って疲れ果てることもあった」と語っているところです。

「蒼」は手書きで書かれており文字が潰れて判読し難いので、文の流れからこの字を当ててみました。木を切り倒した後、次に縦横の道路を作る準備として草原を計測調査する過程を述べています。

二、原文に「又設奨励賑恤之以勗成業矣得不感激奮励協力乎今也」とあるところ

前半部分を「又奨励賑恤ヲ設ケ之ヲ以テ成業ニ勗ム」と読みましたが、「之」の指示内容を明瞭にするための工夫です。

後半部分は「奚ゾ感激奨励協力セザルヲ得ンヤ今ナリ」と読みましたが、ある予備校の講師が「いつ勉強するか、今でしょう」と使って大流行したあの「今でしょう」と同じ使い方です。

土香る会 読み下しグループ

玉田 茂喜、斉藤 海三郎、梅田 滋

2023.12.11